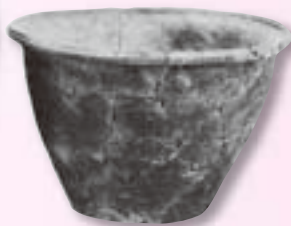


よく似た三つの骨蔵器
— 屍替遺跡の火葬墓 —

▶ 1号火葬墓骨蔵器



2号火葬墓骨蔵器

▼ 3号火葬墓骨蔵器



現代の日本で、ごく一般的な葬法である火葬は、記録のうえでは文武四(七〇〇)年の道昭という僧侶の例が最初とされています。亡骸を棺などに納めて埋める葬法に比べ、燃やして骨を拾い、壺や甕などに入れて埋める火葬の導入は、大きな驚きをもって迎えられたに相違ありません。まず都とその周辺で天皇や官人、僧侶を中心に広まり、やがて地方諸国にも伝わります。東国では8世紀後半から9世紀にかけて火葬墓が多く作られるようになりました。それは、中国を範として歩みを始めた律令国家という時代にふさわしい、新しい中央の文化として受容されたと考えられます。

古代の常陸国は全国的にみても火葬墓の多い地域であり、一つは水戸周辺の那珂川流域、もう一つが石岡・土浦などの霞ヶ浦周辺域に集中しています。後者の地域でまとまった数の火葬墓が見つかったのが、市北東部の台地上に広がる田村・沖宿遺跡群です。遺跡群を構成する15の遺跡のうち、6遺跡から実に21基もの火葬墓が確認されました。このうち屍替遺跡から見つかった3基の火葬墓は、そこに葬られた被葬者の関係性を推測させる特異なものでした。

火葬した骨を入れた骨蔵器は3点とも技法の酷似した須恵器の甕を用い、そのプロポーションもよく似ています。須恵器は、新治窯跡群のなかでも同じ窯で製作されたことを思わせるほど「顔つき」の良く似たもので、いずれも9世紀中ごろのもので、これに須恵器の鉢をかぶせ、円形に掘った穴に据え、周囲には木炭を充填していました。

人骨は、1号火葬墓と称しているものが成人男性、2号火葬墓が成人女性、3号火葬墓が壮年期の成人男性と鑑定されています。骨蔵器やお墓の構造がここまで類似した例は、田村・沖宿遺跡群ではほかに例がなく、ほかの地域を含めても稀な事例といえます。おそらくこの3人は家族ないし近親者であり、比較的短い期間に没したと考えられます。

屍替遺跡でもう一つ注目されることは、1号火葬墓で当時の農具である鉄製の鋤先が骨蔵器のすぐ横に埋められていたことです。このような副葬品を伴って見つかる火葬墓の例は少なく、貴重な事例といえます。被葬者である成人男性が主導したこの地の開墾を象徴する道具として副葬されたものとみられます。

1100年以上前の平安時代の土浦で、新たに土地を拓き暮らした一つの家族の姿に想いを馳せてみてはいかがでしょうか。

今回紹介した資料は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で3月上旬まで展示していますので、ぜひご来館ください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場(☎826・7111)



1号火葬墓出土状況

